



TITLE:

Mountain Gorilla Tourism and Conservation
in Bwindi Impenetrable National Park,
Uganda(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Otsuka, Ryoma

CITATION:

Otsuka, Ryoma. Mountain Gorilla Tourism and Conservation in Bwindi Impenetrable National Park, Uganda. 京都大学, 2021, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2021-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k23302>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2022-03-22に公開

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	大塚 亮真
論文題目	Mountain Gorilla Tourism and Conservation in Bwindi Impenetrable National Park, Uganda (ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園におけるマウンテンゴリラの観光と保全)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、絶滅危惧種として保全の必要性が叫ばれる一方で、野生動物観光において高い経済的成功を収めてきたマウンテンゴリラに焦点を当て、人とゴリラとの接点で起こっている多様な現象を実証的に明らかにし、保全と観光のあいだの望ましいバランスについて総合的に論じたものである。</p> <p>第1章では、本論文が取り組む問題の所在を明示した。野生動物保全に対し観光が与える、観光収入、生息環境劣化、感染症といった正と負の影響についての知見を整理し、双方のバランスを適正に保つ管理の必要性を論じた。また、アフリカにおけるマウンテンゴリラ研究、保全、観光の歴史と現状について詳述した。</p> <p>第2章では、ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園のマウンテンゴリラを対象に、生理学的ストレスの指標である糞中グルココルチコイド (FGCM) 濃度と、社会的、生態学的、また観光に関わる要因との関係を分析した。観光対象である1群のデータを用いて統計モデリングをおこなった結果、1日に訪問した観光客の人数および訪問した観光客グループ数とFGCM濃度との間には正の相関があった。しかし、他群との比較をおこなったところ、観光頻度の少ない群れのほうがFGCM濃度が低かった。なお、この群れには調査期間の数ヶ月前に大きな社会的変化があった。観光によるゴリラへの慢性的ストレスの存在については結論できななかったが、観光客の訪問頻度がFGCM濃度の一時的な上昇に影響した可能性があり、さらなる検討が必要である。</p> <p>第3章では、オンラインメディア上の人と野生ゴリラとの近接関係に注目し、人々がゴリラ観光において持つ潜在的欲求について分析をおこなった。ゴリラ観光の現場では、病気感染のリスクを軽減するために適切な距離 (7m以上) を保つ規則が定められているが、マウンテンゴリラ観光に関する282本のYouTube動画の中で、人とゴリラは78%の動画で同時に映っており、41%の動画で接触または手の届く範囲での近接が確認された。サムネイル画像に人とゴリラの両方が映っている動画は、多くの視聴回数といいね数を獲得していた。人とゴリラの接触または手の届く範囲での近接を含んだ動画は、そうでない動画と比べて多くの視聴回数といいね数を獲得していた。これらの結果から、規則に反する人とゴリラの接触や近接を含んだオンラインメディア上のコンテンツが、多くの人々の興味を惹き、それが観光現場でのルール遵守を妨げるといふ悪循環の可能性が示唆された。</p>			

第4章では、ブウィンディにおける観光客を対象としたアンケート調査、観光客と国立公園職員を対象とした質的インタビュー調査、観光活動の直接観察により、観光客の期待と満足度を高める要因や、観光現場におけるさまざまな課題を明らかにした。多くの観光客は高い保全意識を持っていたが、結果的にゴリラ保全の妨げになる強い要求をする観光客もいた。観光客の満足度は高かったが、混雑感や観察方法などへの懸念が見られた。これらの結果から、保全調和的な観光管理への実践的な提言について検討した。

第5章では、地域住民とゴリラとの関係について、作物被害、害獣認識、ゴリラを追い返す活動を行う住民組織に関する実態調査を行った。ゴリラによる作物被害は、観光と研究のための人慣れによる副産物と考えられている。住民はゴリラについては、観光を通じた経済的利益と結びつけた正の認識を持っていたが、作物被害に対して複雑な感情を抱いている人もいた。住民組織の存在と貢献は高く評価されていたが、深刻な被害を受けながら活動に積極的な関与をしていない地域では評価が低かった。住民組織の構成員は、装備や食料配給などの経済的支援に加え、活動を通じた人的資本の獲得によっても動機づけられていた。

本研究により、ゴリラとその生息環境及び、保全と観光に関わる様々な人々の間に起きている相互関係の複雑さが明らかになった。ブウィンディでは、大きな観光収入に支えられ、他地域で見られるような深刻な利害対立は回避されているが、人とゴリラの過度な接近により、ゴリラの生理学的ストレスや人獣共通感染症、作物被害へのリスクが懸念される状況にある。COVID-19流行後の持続可能な観光と保全のバランスに関する、諸アクター間の合意形成の重要性について、理解を深める必要がある。

(論文審査の結果の要旨)

野生動物保全の活動に、エコツーリズムと呼ばれる観光活動を組入れ、地域に観光収入と雇用を創出し、観光客に対して環境教育の場を提供する取り組みの重要性が高まっている。人気動物が多く生息するいくつかのアフリカ諸国では、野生動物観光は国家や地域に莫大な収入をもたらす主要産業となっている。その一方で、過剰な観光活動は対象動物の生息環境に悪影響を与え、観光客による動物への接近が人獣共通感染症の相方向の感染をもたらし、人慣れした対象動物が、近隣の地域で農作物被害や人身被害を引き起こす問題も指摘されている。つまり、保全と観光の持続的な両立のためには、適切な管理が必要となる。

本論文は、ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園を舞台に、絶滅危惧種でありながら、観光対象動物としての人気が高いマウンテンゴリラと、観光客、地域住民、保全活動従事者といった各アクターとが接点を持つ境界面における相互交渉を、人々とゴリラとの間の適切な距離に注目して多面的に描き出した独創的な論考である。

野生動物観光は、観光客が人に慣れた動物に接近し、観察を行うことで成立する。本論文は、まず観光客とゴリラとの接点となる観光現場において、接近が内包する様々な問題点を洞察し、ゴリラと観光客それぞれに対し、この接近がもたらす意味を検証している。観光客との接近は、ゴリラになにをもたらしているのだろうか。本論文は、生理学的手法を採用し、ゴリラの糞中から抽出したストレスホルモンの分析により、ゴリラが観光活動からストレスを受けているかどうかを問うた。ゴリラのストレスが観光活動の多寡に影響される傾向が見られたが、慢性的ストレスの兆候は見いだせず、ゴリラが持続的に観光を受け入れている可能性も示唆した。

他方、観光客にとってゴリラへの接近が持つ意味を問うため、本論文は、観光社会学的手法を採用し、観光現場での観光客に対するアンケート調査に加え、近年爆発的に普及したオンラインメディアであるYouTubeを対象にした分析を行った。観光現場では、保全的な理由から過度の接近が規則で禁じられているが、オンラインメディア上では規則を守らない過度の接近・接触動画が視聴数や評価を稼いでいる現状が明らかになった。このような、観光客側の接近への欲望がソーシャルメディアにより増幅し、観光現場での過度な要求として悪循環をもたらすという指摘は、時宜を得た秀逸なものと評価できる。

観光により人に慣れたゴリラは、保護区周辺の農村という現場において、地域住民とのあいだに農作物被害という異なる接点を持つようになる。本論文は、環境社会学的手法により、ゴリラやゴリラがもたらす被害への認識について、地域住民の一枚岩でない反応を丁寧に拾い上げている。この地域には、ゴリラの追い返し活動を行う主体的な住民組織があり、すでに20年の活動実績を持つ。本論文は、この組織のメンバーへの徹底

した聞き取り調査により、主体性をもたらす様々な要因について明らかにし、住民参加型保全のあり方について重要な知見をもたらしたと高く評価できる。

本論文の独創性は、なによりもその分野横断性にある。本論文が採用した自然科学と社会科学に跨がる研究手法が、「広く浅く」に墮すことなく、それぞれの分野で通用する高い専門性を持つことは特筆に値する。また、色合いの異なる各章それぞれで、高度で最新の統計的手法を自在に駆使してデータ分析を行っていることも高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2021年1月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。